法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

奄美群島喜界島における明治初期の村別人口と家畜 ： 「喜界島各村地理表」の検証を目的として

島﨑, 達也

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
49
(開始ページ / Start Page)
175
(終了ページ / End Page)
209
(発行年 / Year)
2022-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025479

奄美群島喜界島における明治初期の村別人口と家畜

「喜界島各村地理表」の検証を目的として

島﨑　達也

第1章　はじめに

藩政期後半の奄美群島では、薩摩藩によってサトウキビ栽培が強制された結果、島間の産物の域内交易・島嶼間分業が盛んになったことが指摘されている。[1] 奄美群島の北東端に位置する喜界島の場合、砂糖樽の制作に必要な木材や竹、島で不足する芭蕉繊維を奄美大島から移入し、労働力としての良馬を移出したといわれる。この図式は、木々が乏しい隆起サンゴ礁である喜界島を山林が豊富な奄美大島と対比させるものであり、一見すると合理的である。しかし、喜界島内の環境差まで考慮したものではない。

喜界島は面積57㎢程度の小島であるが、島内に30余の集落（シマ）が点在し、戦中から戦後にかけ

て自給自足の生活を余儀なくされた時代には、集落毎の地理的環境を生かした生業や物々交換が営まれていた。[2] このような集落間の生産活動の地域差は、前近代、さらには先史時代にも存在したと推測できるため、集落立地や遺跡分布を考えるうえで重要な情報となる。

本稿の主題である「喜界島各村地理表」には、明治初期の村ごとの農産物等や石高が記されており、農業の近代化や地租改正以前の生産活動の地域差を数的に把握できる点で、重要な統計資料となる。

第2章「喜界島各村地理表」について

「喜界島各村地理表」（以下、「地理表」とする）は、平成6年（1994）に北海道立アイヌ民族文化研究センター（当時：現在は北海道博物館）が受贈した「山田秀三文庫」に含まれる。同資料の存在は、平成23年（2011）に喜界島郷土研究会に情報提供され、解説・評価を加えて平成25年（2013）10月に活字化された。[3]「山田秀三文庫」には、奄美関係の資料は他に含まれておらず、「地理表」が山田秀三の手に渡った経緯は不明である。[4] しかし、使用された用紙が「鹿兒島縣喜界島支廳」の名が印字された用紙であることから、同庁が作成したものと推測される。[5] 表紙には表題に続いて以下の記載がある。

但　壱小區羽里村川峯村山田村城久村　貳小區五ヶ村　三小區四ヶ村　四小區小野津村　右拾四ヶ村明治十壱年調査其他拾六ヶ村十二年調査相成候ニ付表面一ナラス

この記載から、「地理表」は、明治11～12年（1878～79）にかけて喜界島支庁が実施した調査記録であると推測される。30箇所の村ごとのデータが1丁毎にまとめて記載されている。各ページには、北海道立アイヌ民族文化研究センターによって3桁のページ数が割り振られている。

記載項目は、村名、間切名、小区名、石高、反別（段別）、貢糖量、戸主数、戸数、人口（男女別・職分別）、土地区分、近隣の村への距離、物産一ヶ年出来高、禽獣数、果木数等である。このうち土地は官有地（山林、竹木林、小字名）、共有地（茅野、牧畜場、山林、雑木山、松山、荒田、阿蘭、墓地）、民有地（田、畑、屋敷、開墾地、室蘭地、荒田、荒畑、蘇鉄、芭蕉、松山）、社地に区分され、面積まで記載されており、特に新しく植林された雑木山や松山は、項目を分けて記されている。水源（溜池、出水、小川、清水）と塩製場については、箇所数のみの記載となっている。

「物産一ヶ年出来高」は、一年間の農産物等の生産量を示すもので、黒糖（砂糖）、唐芋（甘薯）、大麦、小麦、大豆、米（籾）、粟、田芋（青芋）、蘭、芭蕉、実綿（木綿）、胡麻、空豆、小豆、黍、小黍、小豆、真綿、煙草、藍玉、焼酎、塩、アダナシについて数値化されている。

「地理表」の表紙にも明記されているように、明治11年（1878）調査の村と、明治12年

（1879）調査の村で調査項目がやや異なる。例として、図2は羽里村（明治11年調査）、図3は阿伝村（明治12年調査）の記載を活字化したものである。

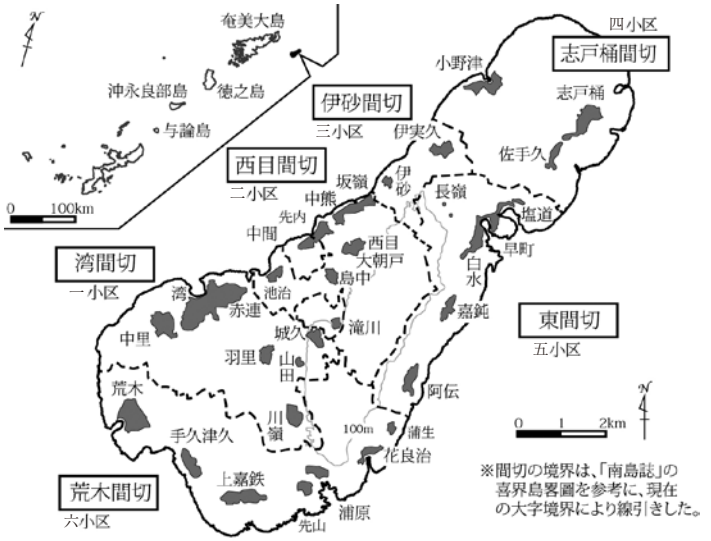
第3章「地理表」の歴史的背景

本章は、断らないかぎり『喜界町誌』[6]を出典とする。

喜界島は15世紀に琉球王国の支配下に入ったとされる。喜界島に、いくつかの村をまとめた琉球王国の行政区画である「間切」が設定されたのはこの時とされる。

慶長14年（1609）の琉球侵攻を受け、奄美群島は薩摩藩の直轄領（蔵入地）となり、道之島と称され、薩摩藩から派遣された代官ら詰役により統治された。当初、喜界島は大島代官が管轄していたが、元禄6年（1693）から喜界島に代官が派遣されるようになり、同年、湾村に喜界島の代官所（仮屋）が置かれた。寛永21（1644）年に幕府が諸国の大名に提出を命じて制作された「正保国絵図」では、喜界島は5間切（湾（碗）・西目・志戸桶・東・荒木）として報告されていたが、後に伊砂間切を加えた6間切に編成された（図1）。間切は、与人ら在地の役人（島役）により明治期まで運営され、文政年間以前は、薩摩から送られた米を蓄える蔵を間切ごとに構えていたとされる。[7]各村には、島役である掟が置かれた。

図１：喜界島の集落分布（昭和期）と６間切の境界



喜界島の石高は、寛永12年（1635）の寛永内検の結果6932石余が設定されたが、享保11年（1726）に喜界島で享保内検が実施され、6間切に1万836石余が設定され、この表高が明治期まで使用されることとなる。

喜界島の代官所は、明治2年（1869）に在番所と改名されたが、のちに火災のため過去の記録が焼失してしまったとされる。[8] 明治4年（1871）7月の廃藩置県後、全国に大区小区制が敷かれ、喜界島は第91大区、間切は小区と改称され、小区の長は戸長に改められた。明治7年（1874）1月20日、前年から奄美群島各島（大島、[9] 喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島）で旧慣調査を実施していた大蔵省一行が来島

図２：明治11年調査の表（羽里村）

- 灣間切
- 小壱區
- 羽里村
  - 東　山田ヘ六丁三拾間
  - 西　灣ヘ拾六丁弐拾弐間
  - 南　池治ヘ弐拾間町
  - 北　川嶺ヘ拾弐丁
- 石高
  - 百九拾五石九斗四升五合九勺六才
  - 段別　三拾六町六反廿弐歩
  - 貢糖　八千弐百斤
- 共有地
  - 八反八畝八歩
  - 民有地
    - 四十三町九反五畝廿三歩
    - 内開墾　八町壱反八畝十二歩
- 戸數
  - 六拾三戸
  - 戸主　五拾七人
  - 人員　三百拾人
    - 男　百四十七人
    - 女　百六十三人
- 職分
  - 才功　貳人
  - 者筆　壱人
  - 掌祠　貳人
  - 農　二百九十六人
  - 工　五人
  - 雜　貳人
  - 人雇　壱人
  - 計總　三百拾人
- 官有地
  - 壱町九反七畝拾五歩
  - 竹林　壱段六畝歩
  - 此ノ処検地外ナレド十年前ヨリ該所之竹木人民ノ用ニ供ス未タ官民未詳
- 同上
  - 内譯
    - 田　九町四反廿五歩
    - 畑　三拾町九反四畝十四歩
    - 屋敷　四町四反九畝二歩
    - 計総　四十八町八反四畝一歩
- 清水
  - 三ヶ所
  - 内譯
    - 村中　壱ヶ所
    - 畠中　二ヶ所
- 壱ヶ年
  - 砂糖　三万六千九百七拾斤
  - 小麥　二石九斗三升
  - 米　貳石九斗三升
  - 胡广　壱斗五升
- 出来
  - 唐芋　貳千二百三拾二石
  - 焼酎　貳石八斗五舛
  - 粟　貳石九斗三升
  - 蔬菜　大根・蕪・東瓜・茄子・南瓜・胡瓜・青芋
- 高
  - 大麥　九石七斗九升
  - 大豆　貳石九斗三升
  - 実綿　五百目
- 禽獸
  - 馬　四十二疋
  - 牛　十九疋
  - 豚　二拾壱疋
  - 野牛　二疋
  - 犬　三疋
  - 猫　拾疋
  - 鷄　五十八羽
  - 獸計総　九拾七疋
- 菓木
  - 蜜柑　五拾六本
  - 九年母　三本
  - 計総　五拾九本

図3：明治12年調査の表（阿伝村）

- 東間切
  - 五小區
    - 阿傅村
      - 東北
        - 南西
          - 嘉鈍村へ拾五町四拾間
          - 花良治村へ拾六町五拾八間
      - 西北
        - 支廳へ壱里拾町拾壱間
- 石高
  - 三百三十四石七斗壱升壱合九夕壱才
    - 内寄高
    - 五小區　嘉鈍村外　貳ケ村ヨリ　百五石五斗九升三合三夕三才
    - 段別
      - 四十三町三段六畝拾四歩
        - 内寄高
        - 五小區　嘉鈍村外　貳ケ村ヨリ　拾二町六段九畝廿三歩
- 戸數
  - 七拾貳戸
    - 戸主
      - 男　六拾九人
      - 女　三人
    - 人員
      - 四百四拾九人
        - 男　貳百貳拾壱人
        - 女　貳百貳拾四人
- 職分
  - 惣代人　壱人
  - 組合代　壱人
  - 農
  - 合計
- 地有官
  - 段別　壱町九段歩
  - 内譯
    - 宇金久　壱町歩
    - 宇フツ　五段歩
      - 宇タカヒラ
    - 四段歩
- 地有共
  - 段別　壱町四段貳畝拾壱歩
  - 内譯
    - 墓地
      - 雑木山　九畝歩　明治八年着手松山
      - 八畝拾三歩
    - 茅野　七畝歩
    - 室蘭　貳畝歩
    - 荒田　三段四畝壱歩
- 地有民
  - 段別　四拾五町七段拾七歩
  - 内譯
    - 畑
      - 田　三拾四町九段壱畝廿歩
      - 七町四段六歩
    - 芭蕉
      - 屋敷　九反三畝拾四歩
      - 七畝八歩
    - 蘓鉄　三段貳畝拾八歩
    - 開墾地　壱町六段九畝拾歩
- 地社
  - 末吉神社
  - 段別　壱ケ所
    - 壱段五畝歩
  - 牧畜場
    - 貳ケ所
    - 茅野
    - 三ケ所
    - 塩製場
    - 貳ケ所
    - 溜池
    - 壱ケ所
    - 出水　三ケ所
    - 小川　三ケ所
- 物産
  - 壱ケ年出来高
    - 黒糖　五萬八千斤
    - 小豆　壱石
    - 藍玉　九拾六斤
    - 甘薯　三拾八万九千斤
    - 粟　七斗八升
    - 煙草　百九十五斤
    - 田芋　八千百廿五斤
    - 胡麻　壱石壱斗四升
    - 籾　六拾六石六斗
    - 大麥　貳拾五石四斗
    - 空豆　拾二石六斗
    - 芭蕉　三百斤
    - 小麥　貳拾石壱斗六升
    - 実綿　三百貳拾五斤
    - アダナシ　五拾斤
    - 大豆　六石四斗
    - 塩　六石五斗
    - 焼酎　貳拾壱石九斗
- 蔬菜之部
  - 大根　蕪
  - 人参　牛蒡
  - 葱　千本
  - 不断草　胡瓜
  - 南瓜　茄子
- 禽獸
  - 牛　三拾五頭
  - 馬　五十五頭
  - 豚　三拾頭
  - 猫　貳頭
  - 犬　拾壱頭
  - 鷄　百二拾五羽
- 菓實
  - 蜜柑　貳拾五本
  - 九年母　三本

し、明治6年（1873）時点の人口や家畜頭数等を調査した。[10] 明治8年（1875）6月12日には、大島大支庁（奄美大島名瀬）のもと喜界島支庁が発足する。

明治10年（1877）の西南戦争を経て、明治12年（1879）7月1日、喜界島で喜界島支庁が廃止されて大島郡の出張所が置かれた。明治15年（1882）11月、戸長役場区画改正により、喜界島は従来の6間切が3間切に統合された。明治19年（1886）4月、喜界島が南西部の湾方役場と北東部の早町方役場に2分されたことにより、間切を単位とした行政区は消滅した。その後、明治41年（1908）の島嶼町村制施行で、喜界島は全域が喜界村となり、従来の村は大字となった。

第4章　問題の所在

喜界島では、明治期後半以降であれば、人口等の地域差（集落差）の分析が可能であるもの[11]の、地租改正（明治12～16年（1879～1883））以前の人口や生産活動、土地制度については、集落単位の数量的なデータを以て論じることができなかった。「地理表」が作成されたのは地租改正の直前であるから、「地理表」の記載から、前近代の集落毎の生産活動や土地利用が正確に読み取れると期待される。

しかし、「地理表」には解決されなければならない大きな問題が残る。それは、奄美群島では類似

する資料の報告例がない[12]ため、その詳細な制作背景や真贋が不明な点である。弓削（２０１３）は、同時期の奄美群島の他資料を紹介しつつ「地理表」の資料的価値を評価しているものの、これは、本人も認めているように書誌的紹介に留まる内容である。弓削の評価材料には、藩政期から明治期にかけての喜界島関連の文献が使用されておらず、左の２点をのぞいて、「地理表」の内容の正確性については言及されていない。

1. 小区・間切を構成する村名の記載が、明治7年（１８７４）の内務省調査の記載と等しい。
2. 「地理表」の書式が、戦前に奄美群島から鹿児島県知事に提出された書式と類似する。

右の２点も、具体的に内容が比較対照されているわけではなく、「地理表」の内容の正確性を示すものとして十分に検証されているとはいえない。弓削自身が提唱したように、「地理表」は、その内容の理解と分析を通して、歴史資料としての信頼性を評価されねばならないだろう。

第5章　本稿の目的と調査手法

他に類例もなく、伝来の経緯も不明な「地理表」は、現時点では信頼できる歴史資料ではない。将来的に「地理表」を生産活動の地域差の分析に使用する事前準備として、信頼性の検証・資料の評価が課題として存在する。そこで本稿では、次の２点を目的に設定する。

① 「地理表」の内容の正確性の検証

② 各村の労働力の明確化

目的①に関しては、様々な分析の過程で、同時代の他資料との比較を通して総合的に評価されるべきであり、本稿内で結論が出せるものではない。本稿では具体的に、村名、間切名・小区名が、藩政期から明治中期頃の他の歴史資料の記載や現代の集落名と矛盾しないかを検証し、村落を単位とした分析を行う基礎作業と位置付ける。

目的②は、「地理表」の記載項目がのうち、村落の生産力を決定する指標となることが期待される基礎情報として「人口」と「使役動物を含む家畜の頭数」をまとめる作業とする。当時の奄美群島では農作業を人力・畜力に頼っていたため、農業生産力の大小は、人口と使役動物の数によって大きく規定されていたという想定が、本研究の前提となる。

方法としては、「地理表」よりそれぞれの値を村ごとに抜き出して一覧表を作成し、適宜、同時代の他の歴史資料と比較して、「地理表」の内容に不自然な点がないことを確認、検証していく。これにより「地理表」を検証・評価しつつ、明治11～12年（1878～79）の喜界島における村単位の労働力の空間分布を明らかにし、今後の研究の基礎資料としたい。他の項目は基本的に扱わない。

記載内容は、平成24年（2012）に喜界島郷土研究会が北海道立アイヌ民族文化研究センター（当時）から取得した複製から読み取った。

第6章　「地理表」の記載内容

第1節　小区名・間切名と村名

「地理表」のそれぞれの村には、当時使用されていた小区名に加えて、明治4年（1871）まで使用されていた間切名も記載されている。喜界島の集落（村）が、それぞれどの間切に帰属していたのかについては、『日本歴史地名大系』[13]が詳細にまとめているほか、『趣味の喜界島史』や『喜界町誌』が出典を明示せずに記載しているものの、「地理表」を評価するためには、一次資料を以って「地理表」に記載された間切名・小区名を検証する必要がある。そこで本節では、藩政期から明治期前半にかけての同時代資料を以って、「地理表」に掲載された村名と、それぞれが所属する間切・小区名が正確であるか検証したい。

表1は、「地理表」と、弓削（2013）が言及した明治7年（1874）の「各府県村名調査報告」[14]に記載された村名、小区名、間切名を比較するものである。これを補足するものとして、明治15年（1882）に鹿児島県が内務省地理局に提出した「鹿兒島県下町村名簿」[15]記載の村名も記載した。時代が遡るが、『島津家文書』「喜界島帳留ノ内」[16]の元禄5年（1692）付の覚[17]は、喜界島で6名の与人が担当する村々を列挙した、筆者が把握する限りでは唯一となる藩政期の資料であるため、比較のために表1に表示した。

表1：喜界島の村名一覧と、帰属する間切名・小区名

現在の集落名	明治11・12年「地理表」				明治7年			明治15年	元禄5年		
	調査年	小区	間切	村名	小区	間切	村名	村名	噯	担当	村名
湾	明治12年	一	湾	灣	一	湾	湾	湾	荒木与人と	湾間切與人噯	湾
赤連				赤連			赤連	赤連			一
中里				中里			中里	中里			中里
川嶺	明治11年			川嶺			川嶺	川嶺			川岸
山田				山田			山田	山田			山田
羽里				羽里			羽黒	羽里			一
城久				城久			城久	城久			城ク
島中		二	西目	島中	二	西目	島中	島中	一噯	細目與人噯分	嶋中
大朝戸				朝戸			朝戸	朝戸			朝戸
西目				西目			西目	西目			細目
中熊				中熊			中熊	中熊			中濃
坂嶺				坂嶺			坂嶺	坂嶺			坂崩
中間		三	伊砂	中間	三	伊沙	中間	中間		伊砂與人噯分	中間
滝川				瀧川			瀧川	滝川			瀧川
伊砂				伊砂			伊沙	伊砂			伊砂
伊実久				伊實久			伊實久	伊實久			伊佐根久
小野津		四	志戸桶	小野津	四	志戸桶	小野津	小野津	一噯	志戸桶與人噯分	小野津
志戸桶	明治12年			志戸桶			志戸桶	志戸桶			志戸桶
佐手久				佐手久			佐手久	佐手久			佐手久
塩道		五	東	塩道	五	東	塩道	塩道		東與人噯分	塩屋
早町				早町			早町	早町			早町
長嶺				長嶺			長嶺	長嶺			永嶺
白水				白水			白水	白水			白水
嘉鈍				嘉鈍			嘉鈍	嘉鈍			嘉鉄
阿伝				阿傳			阿傳	阿傳			嘉傳
花良治		六	荒木	花良治	六	荒木	花良治	花良治	湾与人と	荒水與人噯	□治
浦原				浦原			浦原	浦原			浦原
上嘉鉄				嘉鉄			嘉鉄	嘉鉄			嘉鉄
手久津久				手久津久			手久津久	手久津久			手久津
荒木				荒木			荒木	荒木			荒木

結果、間切名と小区名、それらを構成する村々は、「地理表」と「各府県村名調査報告」の間に差はない。また、漢字表記の揺れや、明らかな誤字こそあるものの、30箇村の村名はいずれも、現在の集落（島嶼町村制施行以降の大字）名に対応する。

興味深いのは、「喜界島帳留ノ内」の、6名の与人が管轄することとなった村々の内訳が、赤連と羽里が抜けていることを除いて、明治初期の間切・小区を構成する村々と一致する点である。ただ、この元禄5年の段階では、5間切を維持したまま6名の与人を3つの曖（あつかい）[18]に配置する旨が明記されている。ここで問題となるのは、伊砂間切が誕生して6間切体制になった時期である。『喜界町誌』は、これより後の元禄15年（1702）献上の「元禄国絵図」[19]で、喜界島が5間切として幕府に報告されていたことを根拠に、元禄15年（1702）以前の喜界島は5間切であったとしている。かつ、『喜界島代官記』において最初に伊砂間切の名称が登場するのが宝永5年（1708）であることから、6間切への編成時期を宝永5年（1708）以前とする。[20]しかしながら、既に6間切体制となっていたはずの天保6年（1835）に作成が命じられた「天保国絵図」でも、喜界島の記載は、「正保国絵図」「元禄国絵図」と同じ内容となっている。加えて、同時に作成されていた「天保郷帳」[21]においても、喜界島の石高と間切数の記載は、享保内検以前の6932石余・5間切のままである。つまり、薩摩藩が幕府に報告した国絵図・郷帳に記載された喜界島の記載情報は、間切や表高の情報が更新されていないのである。このことから、伊砂間切が設置された時期を、国絵図の記載から

表2：宝永年間以降の歴史資料における喜界島の村名・間切名

間切・小区名	村名	年	文献	出典（参考文献（一覧））
灣間切	灣村	宝暦11年	喜界島代官記	参考文献13, p.135
西目間切	朝戸村	文化6年	喜界島代官記	参考文献13, p.156
東間切	嘉託（嘉鈍）	文化10年	喜界島代官記	参考文献13, p.159
東間切	鹽道村	文政8年か	喜界島代官記	参考文献13, p.166
東間切	嘉鈍村	文政8年か	喜界島代官記	参考文献13, p.166
荒木間切	手久津久村	明治3年	喜界島代官記	参考文献13, p.192
東間切	早町村	嘉永3年	喜界島泉家文書	参考文献1, p.97
荒木間切	嘉鉄村	嘉永3年	喜界島泉家文書	参考文献1, p.97
伊砂間切	瀧川村	嘉永3年	喜界島泉家文書	参考文献1, p.97
灣間切	山田村	嘉永3年	喜界島泉家文書	参考文献1, p.97
灣間切	灣村	明治7年	砂糖惣買上方法	参考文献22, p.569
第五小区	阿伝村	大正6年（写）	阿伝村畑方検地帳	参考文献23

求めることはできない。伊砂間切が成立したのは元禄5年以降宝永5年以前（1692～1708）であり、かつ元禄5年（1692）時点で既に6間切体制の素地となる6与人の配置が完成していた、というのが適当であろう。

右の通り、元禄年間と明治初期で間切（または与人の曖分）を構成する村々に差はないが、両者には180年間以上の時期差がある。次は、この間に間切を構成する村に変化が無かったとこを証明したい。そこで、間切名と村名が同一文脈に明記される、宝永年間以降の事例を、喜界島関連資料から抜き出してみた（表2）。事例は多くないものの、表1の内容と矛盾が無いことがわかる。つまり、伊砂間切設置以降の6間切は、藩政期を通して変化していないといえる。

小区については、1例だけ、小区名と村名が使用された資料を見つけることができた。阿伝集落には、享保12年（1728）の畑方検地帳の写本「阿伝村畑方検地帳」が伝わる。[22] 日付から大正6年（1917）の写と推測されるこの検地帳には、阿伝が「地理表」

と同じ「喜界島五小区　阿伝村」と表記されているため、「地理表」記載の小区の記載の正確さが証明できた。

なお、「地理表」に記載された村と、現在の喜界島の集落には、いくつかの差異がある。まず「地理表」には、現在は早町の一部である長嶺が独立した村として記載されている。次に、現在は区長が置かれ、独立した集落とみなされる先山、先内、蒲生、池治の4集落が、「地理表」においては独立した項目が無い。[23] ただし、蒲生は花良治村の項目に「花良治村出村蒲生へ六町貳拾間」との記載があり、池治は、赤連、羽里、中間、島中の各村の項目に同じく記載がある（図2）ため、村落として存在していたことがわかる。先山と先内に関しては「地理表」に記載が見られない。しかし、両者は無人であったわけでは無い。前述の「鹿兒島県下町村名簿」には、村を構成する字名も列挙されているのであるが、先山、先内、蒲生は、それぞれ「﨑山（サキヤマ）」「先内（サキナヘ）」「蒲生田水（カムウタミツ）」という字名で記録されている。[24] つまり、「地理表」の調査対象は、あくまで独立した村（後の大字）であり、村を構成する字（小字）は、記述の対象ではなかったのであろうと推察される。

第2節　人口と戸数

本節では、村ごとの人口と、喜界島全体の人口を扱う。

まず、村ごとの人口であるが、「地理表」と対比できる村別人口の資料には、陸軍省による明治23

年（１８９０）12月31日調査の「徴発物件一覧表」[25]がある。両者を比較すると（表３）、村落単位では人口に大きな差がないことがわかる。その一方で、過半数の16箇村で人口が減少している。特に、滝川では10％を超える減が生じているが、逆に人口が増加した村も多い。喜界島全体の人口について、「地理表」の総人口は１万５４０６人である。明治23年（１８９０）の人口は１万５５８９人なので、明治23年（１８９０）までの11～12年間の増加率は１・２％となり、喜界島全体で１８３人増加している。

次に、この前後の時期の喜界島の人口動態に着目する。嘉永５年（１８５２）から明治３年（１８７０）までの18年間では、人口が２０５３人、18・９％増加し[26]、明治３年（１８７０）から同６年（１８７３）までの３年間では、人口が１００７人増加しており[27]、増加率は４年間で７・８％である。更に、明治６年（１８７３）から、「地理表」が書かれた明治11～12年（１８７８～79）までのわずか５～６年間で１４９４人、10・７％という大きな人口の伸びが生じたことになる。また、先述の「徴発物件一覧表」は明治33年（１９００）12月31日調査[28]と明治35年（１９０２）12月31日調査[29]のデータがあるが、明治23年（１８９０）から明治33年（１９００）までの11年間で１７９６人、11・５％も増加している。よって、「地理表」が作られてから明治23年（１８９０）までの11～12年間の人口増加率だけが、前後の時期と比較して明らかに低いといえる。

この一時的な増加率の鈍化と、多くの村での人口減の要因は、今後も検証が必要であろう。とはい

表3：村別人口・総人口の変遷

現在の集落名	嘉永5年（人）	明治3年（人）	明治6年（人）	明治11･12年（人）	明治23年（人）	明治33年（人）	明治35年（人）	明治11・12年～明治23年の増加率
湾				1,124	1,117	1,218	1,260	-0.6
赤連				922	934	968	987	1.3
中里				734	677	700	712	-7.8
川嶺				503	548	913	613	8.9
山田				103	104	115	115	1.0
羽里				310	306	337	356	-1.3
城久				400	388	379	388	-3.0
島中				342	368	407	449	7.6
大朝戸				375	420	444	449	12.0
西目				181	164	176	190	-9.4
中熊				267	287	297	306	7.5
坂嶺				517	494	528	557	-4.4
中間				327	304	325	328	-7.0
滝川				213	185	226	234	-13.1
伊砂				157	149	185	184	-5.1
伊実久				472	451	475	481	-4.4
小野津				1,087	1,169	1,366	1,398	7.5
志戸桶				1,130	1,107	1,226	1,267	-2.0
佐手久				494	469	491	508	-5.1
塩道				315	335	393	434	6.3
早町				223	228	282	288	2.2
長嶺				78	82	92	89	5.1
白水				284	282	300	322	-0.7
嘉鈍				442	423	460	484	-4.3
阿伝				449	497	606	659	10.7
花良治				510	557	694	766	9.2
浦原				753	742	770	761	-1.5
上嘉鉄				1,001	1,032	1,165	1,167	3.1
手久津久				679	652	717	700	-4.0
荒木				1,014	1,118	1,130	1,195	10.3
合計（人）	10,852	12,905	13,912	15,406	15,589	17,385	17,647	1.2

え、全体的に「地理表」記載の人口は、嘉永5年（1852）から明治35年（1902）にかけて増加していく人口推移の範疇からは外れておらず、11～12年後の陸軍省の調査成果と照らし合わせても、概ね妥当な数字なため、信頼できる内容とみなせる。

「地理表」には戸数も記載されているため、人口を補足するデータとして本節で紹介する。村別の戸数を表4に示した。全島合計は3000戸で、人口をこの戸数で割ると、1戸あたりの平均人数は、村ごとに3・8～6・2人と差はあるものの、四分位範囲を算出すると、1戸あたり4・8～5・5人で、30集落の中央値は同5・17人、喜界島全体では同5・14人である。村ごとの人口と戸数の相関係数は0・97と非常に強い。

人口と戸数両方の記録がある嘉永5年（1852）と明治3年（1870）、明治23年（1890）、明治33年（1900）、明治35年（1902）の1戸あたりの平均人数を算出してみた（表4）[30]。人口と異なり、戸数は増加と減少を繰り返しているものの、1戸あたりの人数は、年を経るごとに増加している。この理由は不明であるが、「地理表」から算出した1戸あたりの人数（5・14人）は、この増加傾向の範疇に入るものである。

第3節　獣禽

「地理表」の「獣禽」に記載があるのは、牛、馬、豚、野牛、犬、猫、鶏、家鴨（アヒル）である。

表４：村別戸数・総戸数の変遷

現在の集落名	嘉永５年（戸）	明治３年（戸）	明治11・12年（戸）	明治23年（戸）	明治33年（戸）	明治35年（戸）	1戸あたり人数（明治11・12年）
湾			219	232	258	231	5.13
赤連			170	180	203	182	5.42
中里			134	127	136	113	5.48
川嶺			90	88	101	107	5.59
山田			20	20	25	26	5.15
羽里			63	63	62	70	4.92
城久			77	67	78	76	5.19
島中			88	71	81	85	3.89
大朝戸			99	98	84	73	3.79
西目			36	43	40	31	5.03
中熊			60	55	54	36	4.45
坂嶺			101	104	98	78	5.12
中間			64	66	57	48	5.11
滝川			41	37	41	43	5.20
伊砂			39	33	33	24	4.03
伊実久			99	99	95	75	4.77
小野津			213	201	198	204	5.10
志戸桶			213	203	202	182	5.31
佐手久			107	94	91	81	4.62
塩道			72	60	60	60	4.38
早町			40	57	58	54	5.58
長嶺			14	15	17	7	5.57
白水			54	53	49	40	5.26
嘉鈍			79	72	70	69	5.59
阿伝			72	80	86	90	6.24
花良治			90	100	98	101	5.67
浦原			131	125	145	141	5.75
上嘉鉄			163	173	181	199	6.14
手久津久			177	126	143	109	3.84
荒木			175	186	205	166	5.79
合計（戸）	2,136	2,515	3,000	2,928	3,049	2,801	
1戸あたり人数	5.08	5.13	5.14	5.32	5.70	6.30	

まず「野牛」という名称についてであるが、これは、明治期の喜界島で「ヤギ」を意味した単語である。根拠としては、明治29年（１８９６）以降の阿伝村の記録を活字化した『喜界島阿傳村立帳』で、同村出身の岩倉市郎が、野牛という記載に山羊と注釈していることによる。[31] 加えて、「南島誌」の喜界島と奄美大島の項では、ヤギは「山羊」と表記されているが、当時琉球にヤギを移出していた沖永良部島の項では「野牛」と表記されている。徳之島の項では「野牛（山羊カ）」と記載されている。[32] このことから「野牛」は、当時の奄美群島の、少なくとも一部の島民間で使用されていた漢字表記であり、東京から派遣されてきた大蔵省の役人にとっては馴染みがない表記であったことがわかる。

表５は、「地理表」記載の獣禽の頭数を村ごとにまとめ、全島で合計したものである。[33] これが妥当な数値であるのか、比較検討できる資料には、「南島誌」と、やや古いが享保内検時のデータがある。享保内検の結果は、「大御支配次第帳」[34]に牛と馬の頭数の記載があり、「南島誌」は、喜界島の走獣に、牛、馬、豚、山羊、犬、猫を挙げ、このうち牛、馬、豚の全島合計数を記載している。また、先述の陸軍省の「徴発物件一覧表」（明治23年（１８９０）調査）[35]には牛馬の頭数の記録がある。これらの数値も表５下部に記載した。

まず気が付くのは、明治６年（１８７３）からの５～６年間で、牛と豚は約３割、馬に至っては９割近くも頭数が増加している点である。次に、馬と牛の割合に着目すると「地理表」の記載は、牛より馬の占める割合がやや高く、明治６年（１８７３）と享保11年（１７２６）の値は、反対に牛の割

表５：明治11・12年の村別獣禽数と他時期との比較

現在の集落名	牛	馬	豚	犬	猫	野牛（山羊）	鶏	家鴨（鵞）
湾	103	180	91	25	7	5	200	4
赤連	64	110	60	20	15	5	320	
中里	70	75	18	3	15	2	315	4
川嶺	35	63	32	9	10	1	174	
山田	15	11	17	3	8		36	
羽里	19	42	21	3	10	2	58	
城久	38	52	26	8	5	空欄		
島中	30	15	50	3	5		102	
大朝戸	35	22	57	3	2		100	
西目	25	15	20	1	1		50	
中熊	23	32	40	4	4		100	
坂嶺	48	37	53	3	3		105	
中間	19	20	空欄	10	5		59	
滝川	20	15	25	10	3	空欄	55	4
伊砂	10	30	19	10	5		39	
伊実久	96	57		13	14		117	5
小野津	138	165	170	5	8		250	
志戸桶	130	160	55	52	6	2	空欄	
佐手久	30	60	23	20	3		空欄	
塩道	34	35	35	16	7		62	2
早町	20	15	18	3	2		30	
長嶺	5	5	12	2	2		30	
白水	21	18	20	5	2		80	2
嘉鈍	40	60	32	13	5		120	3
阿伝	35	55	30	11	2		125	
花良治	43	60	30	11	4		150	
浦原	46	60	50	5	4		170	7
上嘉鉄	100	130	135	8	10		480	
手久津久	99	116	130	15	25		350	4
荒木	95	80	135	40	35	2	410	15
合計	1,486	1,795	1,404	334	227	19	4,087	50
明治23年	732	1,980						
明治６年	1,099	952	1,111	数値なし	数値なし	数十	数値なし	数値なし
享保11年	1,432	1,072						

合がやや高い。明治23年（１８９０）の調査時には馬の頭数が更に増加している反面、牛が半減し、7割以上を馬が占めるようになる。やや新しくなるが、明治41年（１９０８）の統計調査[36]では、牛５２１頭に対して馬２５２９頭と、馬の割合が8割を超えている。

以上、喜界島では、使役動物としての牛馬の割合が、明治期を通して大きく変化したことが分かる。藩政期には、牛の割合が馬よりもやや多かったものの、明治6年（１８７３）以降の数年間で、馬の頭数が急増した結果、馬の割合が高くなり、明治中期から後期にかけて急激に馬の割合が増加している。「地理表」の数値は、牛馬の割合が逆転していく様子を明確に示している。

「地理表」記載の30箇村で唯一、羽里村の項目には「獣総計」という項があり、鶏を除く家畜の頭数の合計を記載している（図2）。このことから「地理表」は、鳥類と四足獣の総計を分けて把握することを目的としていたことが読み取れる。

第7章　考察

本章では、第5章で設定した2つの目的を検証する。

目的①：「地理表」の内容の検証

間切名、小区名、村名、人口、戸数、家畜数に絞って「地理表」の内容を検証したところ、「地理

表」の内容は、藩政期から明治中期頃にかけての他資料の内容と矛盾しておらず、おおむね整合性がとれていることが判明した。

「地理表」の執筆過程について若干の考察を加えてみる。「地理表」の記載を見比べてみると、村ごとに筆跡が顕著に異なる。よって、「地理表」は、村ごとに記入者が異なる可能性が高い[37]。加えて、「地理表」の記載内容は、村ごとに表の形態や表記単位に差がある（北島・勇２０１３）。これらの点から、「地理表」のもととなった調査は、基本的な調査項目が設定されたうえで、各村に委ねられた計量や調査となり、それが特定の集計者による修正を介さずにまとめられたため、記載内容にばらつきが生じたと推測できる。つまり、「地理表」は後世の写本ではなく、原本である可能性が極めて高い。

また、ヤギが「山羊」ではなく、専ら地元で使用されていた「野牛」という表記で記されている点も、「地理表」が地元喜界島の人物によって執筆されたことを示唆する。

これらにより、現時点で「地理表」は、信頼できる歴史資料であると判断できる。もっとも、この検証は、「地理表」を用いた様々な分析を通して総合的に行われるべきであり、本稿で完結されることがあってはならない。

目的②：各村の労働力の明確化

本稿で分析した内容で生産活動に関わるのは、人口と、畜力となる使役動物の頭数である。まずは、当時の喜界島で使役動物がどのように使用されていたのかを明確にする必要がある。大蔵省調査「南島誌」では、大島、徳之島、沖永良部島の項にて、耕作は主に牛を用い、馬は荷物の運搬に用いる、と説明されている。残念ながら喜界島の項には「諸島ニ同シ」等とあり、良馬の産地であること以外に具体的な記載がないが[38]、明治初期に薩摩藩が喜界島で農業指導を行った際、牛を用いて田畑を耕すことが指示されている[39]。また、喜界島の農村を再建した与人、泉禎民（寛政10年（１７９８）生まれ）の功績を記した書[40]には、生活に困窮した山田村の村民の窮状が「～牛馬家財は勿論、妻子迄も賣拂い～」と表現されており、泉は自身の牛馬を村民に貸し出して農作業を勧めている。よって、今回分析できる獣禽で、畜力となるのは牛と馬である。

第６章では、享保年間から明治初期にかけて、喜界島では牛と馬の頭数はほぼ等しかったことを明らかにした。本章では、主に耕作に用いられた牛と、主に輸送に用いられた馬の頭数の合計が、島民が農作業を主とする生産活動に利用できた畜力であるとみなし、人口比を算出してみる。もちろん人口にも牛馬の頭数にも労働に適さない、従事しない個体数が含まれることが想定されるため、これはあくまで理論上の数値である。

「地理表」で算出した喜界島の人口は１万５４０６人、牛馬の合計は３２８１頭なので、ひとりあ

たり約0・21頭の牛馬が利用できる計算になる。言い換えれば、約4・7人で牛馬1頭を使用できる。ただ、このような牛馬は、個人というより家々が所持していたと考えるのが自然であるから、人口ではなく戸数3000で割ると、各戸に牛馬が1・09頭存在する計算になる。大蔵省が、明治初期の喜界島では牛馬を3～4頭以上有する家[41]は上等、1～2頭有する家を下等と記録していることからしても、[42]各戸に平均1頭以上という値は妥当なものである。

次に、頭数の地域差についてであるが、1人あたりおよび1戸あたりの牛馬の頭数には、村ごとの差が認められる（表6）。しかし、四分位範囲を算出してみると、1人あたり0・16～0・23頭および1戸あたり0・85～1・24頭になり、多くの村では、そこまで大きな村間格差は無い。村ごとの牛馬の頭数との相関係数は、村の人口（0・93）も村の戸数（0・95）も非常に高いため、明治11～12年（1878～79）の喜界島においては、村ごとの使役動物の頭数は人口・戸数によって規定されていたと考えられる（図4―1・4―2）。これは、牛馬は耕作時等に畜力となりうる反面、その維持には飼葉や飼料となるサツマイモの確保が必要なため、[43]人口規模を大きく超えた数の牛馬を養うことが困難であったためと推察される。つまり、牛馬を人口に比して多く所有している村では、生産活動に対して、より多くの牛馬を利用できる反面、その牛馬の維持にも多くの労力を割く必要があった、という推測である。人口と牛馬の強い相関関係からは、当時の喜界島について、牛馬を多く所有したことで他村よりも突出して高い生産力を有していた村の存在は、想定しにくい。

表６：明治11・12年の村別牛馬比率と１人あたり・１戸あたりの牛馬頭数

現在の集落名	牛（頭）	馬（頭）	牛馬合計	馬の割合	１人あたりの牛馬頭数	１戸あたりの牛馬頭数
湾	103	180	283	63.6	0.252	1.292
赤連	64	110	174	63.2	0.189	1.024
中里	70	75	145	51.7	0.198	1.082
川嶺	35	63	98	64.3	0.195	1.089
山田	15	11	26	42.3	0.252	1.300
羽里	19	42	61	68.9	0.197	0.968
城久	38	52	90	57.8	0.225	1.169
鳥中	30	15	45	33.3	0.132	0.511
大朝戸	35	22	57	38.6	0.152	0.576
西目	25	15	40	37.5	0.221	1.111
中熊	23	32	55	58.2	0.206	0.917
坂嶺	48	37	85	43.5	0.164	0.842
中間	19	20	39	51.3	0.119	0.609
滝川	20	15	35	42.9	0.164	0.854
伊砂	10	30	40	75.0	0.255	1.026
伊実久	96	57	153	37.3	0.324	1.545
小野津	138	165	303	54.5	0.279	1.423
志戸桶	130	160	290	55.2	0.257	1.362
佐手久	30	60	90	66.7	0.182	0.841
塩道	34	35	69	50.7	0.219	0.958
早町	20	15	35	42.9	0.157	0.875
長嶺	5	5	10	50.0	0.128	0.714
白水	21	18	39	46.2	0.137	0.722
嘉鈍	40	60	100	60.0	0.226	1.266
阿伝	35	55	90	61.1	0.200	1.250
花良治	43	60	103	58.3	0.202	1.144
浦原	46	60	106	56.6	0.141	0.809
上嘉鉄	100	130	230	56.5	0.230	1.411
手久津久	99	116	215	54.0	0.317	1.215
荒木	95	80	175	45.7	0.173	1.000
合計	1,486	1,795	3,281	54.7	0.213	1.094

図4-1：明治11・12年の村毎の人口と牛馬頭数の相関関係

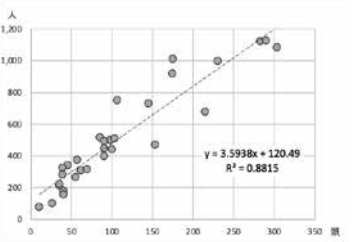
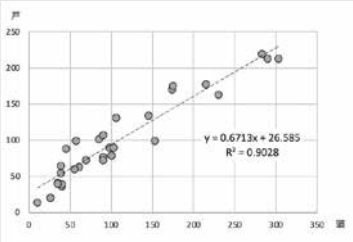


図4-2：明治11・12年の村毎の戸数と牛馬頭数の相関関係



最後に、馬と牛の違いについて、牛馬に占める馬の割合を村ごとに算出すると（表6）、33・3～75・0％（四分位範囲：44・1～59・6％）と、村間の格差が大きい。つまり、馬の割合が特に高い村と、牛の割合が特に高い村があるのだが、本稿ではこの差異については特に追求せず、別の機会に論じたい。

まとめと今後の課題

本稿は、地租改正以前の喜界島における前近代の生産活動の地域差分析に「地理表」が用いられることを期待したうえで、「地理表」の信頼性の検証・資料の評価を課題とし、目的を2つ設定して「地理表」の内容を分析した。

目的①は、内容の検証である。間切名、小区名、村名、人口、戸数、獣禽の記載内容は、藩政期～明治中期頃の他の歴史資料の内容と矛盾がなく、妥当な内容である。また「地理表」は、村落単位の人口、戸数、家畜（獣禽）数の統計値としては、現存する喜界島最古の資料で

あることが確認できた。村ごとに記入者が異なる可能性が高い点、奄美で用いられた表記が使用されている点から、「地理表」が喜界島支庁により作成された一次資料であることが想定できるものの、これらは「地理表」に記載された情報のごく一部に過ぎないため、本稿の結果のみをもって、「地理表」を評価すべきではない。今後も、内容の分析を通して「地理表」の検証を続けていく必要がある。

目的②は、各村の労働力の明確化である。本稿では、労働力を人口と牛馬の頭数からなるとみなし、その村別分布を明確化した。結果、人口・戸数と牛馬の頭数には強い相関関係があり、人口に対する牛馬の頭数に顕著な村落格差は認められないことが判明した。

「地理表」の歴史資料としての信頼性が、ある程度は検証できたため、次稿では、本稿の成果を以て「地理表」に記載された農産物等や石高の分析を行っていきたい。

附記

「地理表」の存在は、小川正人氏（当時：北海道立アイヌ民族文化研究センター）から、町健次郎氏（瀬戸内町図書館・郷土館）、弓削政己氏（喜界島郷土研究会）を介して喜界島郷土研究会に情報提供されました。その後、喜界町埋蔵文化財センターの臨時職員（当時）として筆者が来島したご縁で、このたび「地理表」を分析させて頂きました。喜界島郷土研究会の方々、特に勇勝美氏、北島公

一氏には、拙稿執筆を快諾して頂いたばかりか、画像や情報もご提供いただきました。校正では、重松希美氏の協力を得ました。皆様に感謝申し上げます。
この他、「地理表」分析に多くの方々にご協力いただきましたが、いずれも次稿の内容に関わるため、本稿の附記ではご芳名を省略させて頂きます。

【参考文献（一覧）】

1. アチックミューゼアム（編）１９３９『喜界島代官記　喜界島調査資料第二』
2. アチックミューゼアム（編）１９４０『喜界島阿傳村立帳　喜界島調査資料第三』
3. 鹿兒島縣大島々廳１９１０『明治四十一年鹿児島県大島郡統計書』
4. 鹿児島県歴史資料センター黎明館（編）２００５『鹿児島県史料　薩摩藩法令史料集二』鹿児島県
5. 喜界町誌編纂委員会（編）２０００『喜界町誌』喜界町
6. 北島公一・勇勝美（編）２０１３『喜界島郷土研究会会報いしづみ　別冊Ⅱ 喜界島各村地理表　明治十一、十二年の喜界島情勢資料』喜界島郷土研究会
7. 小林茂・中村和郎・森脇広・中井達郎１９８４「奄美諸島の石灰岩台地と伝統的環境利用」『人類科学』36

8. 国立公文書館デジタルアーカイブ「天保国絵図　琉球国（大島）」
https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/detail/detailArchives/0303000000_8/0000000321/00
9. 竹内譲１９６０『趣味の喜界島史　増補改訂版』黒潮文化会
10. 竹内譲１９６９『喜界島の民俗』黒潮文化会
11. 地理局編纂物刊行会（編）１９８６『明治前期全国村名小字調査書』第５巻　ゆまに書房
12. 東京大学史料編纂所２０００「REEL No. 島津家本―０１２０」『島津家文書』東京大学出版会（マイクロフィルム資料）
13. 野見山温（編）１９６９『福岡大学研究所資料叢書第１冊　道之島代官記集成』福岡大学研究所
14. 林蘇喜男１９９４「薩摩藩下の徳之島における行政区域名「曖（あつかい）」について」『奄美博物館紀要』４
15. 一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター（編）１９９０ａ『明治徴発物件表集成第21巻　徴発物件一覧表　明治24年（４）』レクス出版
16. 一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター（編）１９９０ｂ『明治徴発物件表集成第22巻　徴発物件一覧表　明治24年（５）』レクス出版
17. 一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター（編）１９９０ｃ『明治徴発物件表集成第26巻　徴発物件一覧表　明治34年』レクス出版
18. 一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター（編）１９９０ｄ『明治徴発物件表集成第27巻　徴発

物件一覧表　明治36年』レクス出版
19. 福井保（解題）1984『内閣文庫所蔵史籍叢刊第56巻　天保郷帳（二）附元禄郷帳』汲古書院
20. 芳即正・五味克史（監修）1998『日本歴史地名大系47　鹿児島県の地名』平凡社
21. 松下志朗1969「南嶋雑集（下）」『福岡大學文理論叢』13（4）福岡大学研究所
22. 松下志朗（編）2009『南西諸島史料集三』南方新社
23. 三木靖1973「喜界島と島津藩政」『南日本文化』6
24. 盛山末吉1993『しつる村物語』髙城書房出版
25. 矢野正浩1995「喜界島の人口変化と生業の変遷―明治末からの集落別人口変化を中心にして―」『南西諸島における集落構造の総合的研究（4）―喜界島の事例―　南九州地域科学研究所報第12号』
26. 弓削政己2000a「芭蕉と域内交易」参考文献5　第七章第四節
27. 弓削政己2000b「砂糖樽木と喜界島」参考文献5　第七章第五節
28. 弓削政己2005「奄美島嶼の貢租システムと米の島嶼間流通について」『沖縄県史各論編4　近世』沖縄県教育委員会
29. 弓削政己2013「はじめに」参考文献6
30. 琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課（編）1992『琉球国絵図史料集　第1集　正保国絵図及び関連史料』沖縄県教育委員会

31. 琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課（編）１９９３『琉球国絵図史料集　第２集　元禄国絵図及び関連史料』沖縄県教育委員会

【注】

（１）小林・中村・森脇・中井（１９８４）、弓削（２０００ａ）、弓削（２０００ｂ）、弓削（２００５）

（２）筆者聞取り調査（平成27年（２０１５）～）より。

（３）弓削（２０１３）

（４）地名研究の関係で谷川健一らから入手した、または、山田秀三が農商務省に勤務していた縁で柳田國男経由で入手した、等の意見がある（弓削２０１３）。

（５）弓削（２０１３）

（６）喜界町誌編纂委員会（２０００）

（７）野見山（１９６９）、p.169

（８）松下（２００９）、p.543

（９）奄美大島に加えて、加計呂麻島、与路島、請島を含む（松下２００９）。

（10）野見山（１９６９）、p.205

（11）矢野（１９９５）

(12) 弓削（２０１３）
(13) 芳・五味（１９９８）
(14) 地理局編纂物刊行会（１９８６）
(15) 地理局編纂物刊行会（１９８６）
(16) 鹿児島県歴史資料センター黎明館（２００５）、東京大学史料編纂所（２０００）。表１には東京大学史料編纂所（２０００）の記載を使用した。
(17) この覚によると、元禄４年（１６９１）に、それまで５間切に10名いた与人を５名減員したところ、与人が５名では不都合と申し出があったため、元禄５年（１６９２）に伊砂与人を新たに任命した。喜界島を５間切のまま３つの噯に分割して、６名の与人が２名ずつ相役となり、それぞれの噯を管理することとなった。
(18) 奄美群島における噯は、徳之島にのみに存在したとされる間切より下位の行政区域名である（林１９９４）。しかし、「喜界島帳留ノ内」に記載された噯の内容をみると、間切を超えた広域行政単位と、与人に付された担当地区としての２つの性格が見て取れ、後者が徳之島の噯に近いと思われる。なお筆者は、この覚以外に喜界島で噯が使用された事例を把握していない。
(19) 琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課（１９９３）
(20) 喜界町誌編纂委員会（２０００）、p.187、野見山（１９６９）、p.119
(21) 福井（１９８４）

（22）三木（１９７３）

（23）先山は浦原の下島が戦前に改称、先内は中熊の小字、蒲生は花良治からの移り百姓による集落、池治は島中の小字とされる（いずれも竹内（１９６９）より）。

（24）「鹿兒島県下町村名簿」には池治の名前が見当たらない（地理局編纂物刊行会（１９８６））。

（25）一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター（１９９０ａ）

（26）松下（２００９）、p.543、喜界町誌編纂委員会（２０００）、p.201

（27）松下（２００９）、p.543

（28）一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター（１９９０ｃ）

（29）一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター（１９９０ｄ）

（30）嘉永５年（１８５２）と明治３年（１８７０）は「南島誌」記載の島民の私記を根拠とする戸数、明治23年（１８９０）は「家屋　戸数」、明治33・35年（１９００・１９０２）は「現住戸数」の数を採用した。

（31）アチックミューゼアム（１９４０）、pp.4,10

（32）松下（２００９）、pp. 490, 544, 595, 650

（33）斜線は項目自体が存在しない状態を示す。「空欄」は表中に項目として記載されているが、数値が記載されていない状態を示す。「数値なし」は、文章中に存在することは記載されているが、数値が記載されていない状態を示す。

（34）野見山（１９６９）

（35）馬の頭数は、「馬匹」の合計を使用した（一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター１９９０ｂ）

（36）鹿児島縣大島々廳（１９１０）

（37）断定は避けるが、複数の人物が、それぞれ1～数箇村の記入を担当したと推測される。

（38）松下（２００９）、pp.446-447, 520-521, 544, 572, 632, 664

（39）野見山（１９６９）

（40）「喜界島泉家文書」（アチックミューゼアム１９３９）

（41）正確には「モノ」と記載されているが、大島の項の貧富の差の書き方を読む限り、「モノ」は個人ではなく「戸」「家」を示すとみられる（松下（２００９）、pp.442-443）。

（42）松下（２００９）、p.538

（43）盛山（１９９３）、pp.48-53, 285